

---

# ねこみみ

弥月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ねこみみ

### 【著者名】

弥月  
ねこみみ

N5513V

### 【あらすじ】

ネコ///の力チューシャがなぜか持つていて……。

藤崎総受け小説。

pixivにも載せております。

今、手に持つて いるものに安形は首を傾げた。

何故か、カバンの中にネコ耳のカチューシャが入っていた。  
可愛らしいネコ耳カチューシャが、黒と白。

なぜか自分のカバンの中に、入っていたのだ。  
安形は無意識に眉間にシワを寄せてしまう。

なぜカバンに入っていたかをよく状況を思い出してみた。

(そういえば、こないだ将棋の勝利品で貰つたが、それはミモリンに渡したし……。あつそういうやまた別で貰つたか。流行つてんのかネコ耳。で、間違えて学校に持つてきたつてところだらう……つてどんだけ寝ぼけてたんだよ！…)

思い出した事柄に自分自身にツッコミを入れた。

頭を搔きながら、持つても仕方ないから、とりあえず机の上に置く。

今日は一番乗りに生徒会室に来た訳だし、4時の定例会議にもまだまだ時間に余裕がある。

昼寝しても構わないだらうと安形は自分の席に座つた。

口差しも穏やかだし、柔らかくフィットする椅子に、うとうと意識を飛ばしかけたとき、ガラリッとドアの開く音がした。  
飛びかけていた意志が若干引き戻され、ちらりとドアの方を見る。  
生徒会の誰かだろうと思っていたが違つた。

気まずそうに入ってきたのはボッシュこと藤崎だ。

あたりをきょろきょろと伺つている。

大きなあぐびをしながら安形は、涙が出てくるのを堪えて、

「どうした、藤崎。また何か備品壊したか？」

「あいやっぱりわかるか」

「かつつかつか、前にも言つただろ？お前がここに来る時は何かを起こしたときぐらいだからな。今日は何を壊したんだ？」

すっかり眠気も冴えて、安形は笑いながらボッスンに聞く。

「今日はって言つなよ。なんか毎回壊してるとかいじやん」

「もううつとした顔で、ボッスンは答えると、安形はにやっと笑つて、  
「やうじってこないだ窓ガラス割つたのは誰かな？」

「う」

「まあどうでもいいにさじよ」

安形は立ち上がり、藤崎の前に立つと一枚の紙を差し出す。  
ボッスンはその紙を受け取る。

「始末書だ。事情聽くのめんどくせーし、空いてる席で書いてくれ

「ついで聞くのめんどくせこののかよーー。」

安形に突っ込みを入れつつ、ボッスンは安形を睨んでから適当にな  
椅子に座り書き始めた。

安形はさつきのやりとりで田代が覚めてしまったため、昼寝をする

のはじりかねが悩んでいた。ぼーとボッシュを見てこたりふと想つ。

(やうこや、ツノ帽子外した姿ってあんま見ないよなあ。あつ……  
カチューシャしたらどうなるかな……)

そつ思考が過ると、つい試したくなるものだ。

「なあ藤崎」

「なんだよ」

「帽子取つてみてくれよ」

「はあ？ なんでだよー..」

「見たくなつたから」

「却下。俺は今書く事で必死なんだよー！ 椿にバレたらいづらなるか  
わかつてるだろー..」

ブツスつとした表情は変えないで、ボッシュは書き続ける。  
安形は顎に手を当てて、考えた振りをしながら、

「じやある条件をしたら書かなくていいのほじりだ~」

「えつまじーー..」

「マジ。椿にも秘密しててさる

にじりと笑つ安形の姿に、ボッシュは気付かず、

生徒会長の机に身を乗り出して聞く。

「で、条件つてなんだよ」

「これ、つけてみろよ」

そう差し出されたのは、黒色のカチューシャ。

藤崎は安形とカチューシャを交互に見ながら怪訝した顔で、

「なんでこんなのが生徒会室にあるんだよ……」

「まあ堅い事はいいじゃないか」

「よくねえーよ！……俺はネコ耳カチューシャしないからな。まだ始末書の方がました」

バンッと机をたたく藤崎に対して安形は、すました笑顔を変えないまま。

「椿にこいつがやおつかな」

「あつおまえ！……ひつ卑怯だぞ」

絶対椿のことだ『貴様、いいかげん学習つてものがないのか！…』等とガミガミ言われるに決まってる。考えただけでめんどくさい。

それを察したのか安形は、

「別にいいじゃねえか。ただつけるだけだろ？」

「……ちつ仕方ねえな。……ちょっとだけだぞ」

そういうと、ボッスンは帽子とゴーグルをとり、ためらいつつも力  
チュー・シャをつける。

だが付けると言った目の前の男は、プルプルと小刻みに肩が震えて  
いる。

これはどう見ても……

「なに笑つてんだてめえ！？」

「いや、すまん。似合いすぎで」

「似合つてね！俺は帰る」

ボッスンは帽子とゴーグルを素早く掴み、安形に背を向けたが片手  
をぱしつと掴まれた。

むくれた顔を安形に向けると、

「まあまあ。ちょっと待つてろよ」

「なにが待てだ！」

「もうすぐ、あいつもくるからよ

「あいつって誰だよーどうせ生徒会メンバーだろ」

「いや違う

そう安形が言い切ったとき、思い切りバンッとドアが開く音が聞こ  
えて、振り返れば、ヒメ口とスイッチだ。

なぜ彼らがここに来たことに思わずぽかんとしてしまったボッシュ。ヒメコは、頬を赤く染め上げて勢いよくボッシュに近づき、

「ほつボッシュ……めっちゃかわいい…………なんやの……なんやの……めつちや似合つやん…………」

「わわわ……似合つてねーし、ちょっと迫るのやめて……」

「やめへん……むつと近くで見せろや……」

『たしかに、ヒメコが絶叫するのもよくわかる。ボッシュ可愛いぞ（＊、＊）』

「そんなこと言つてないでスイッチ助けるよ……」

『ガンバレ ボッシュ（笑）』

「笑うな……」

けたたましい声で叫ぶボッシュ。

二人してにやにやが止まらないようである。

「ところでなんでお前らも生徒会に来てんだよ」

ボッシュはヒメコと距離を置きながら、スイッチに話しかける。

『それはこれだ』

スイッチはパソコンを向けて、メール画面をボッシュに見せた。すると、ボッシュの顔がまるまる赤くなつていて、安形に迫る。

「あら、バレた？」

「バレた？ じやねえよー！」

「いいやん、余暉さんのおかげでうちら、いいもん見れたし」

『まつたくだ』（）

ほくほくする一人をボツスンが睨み。

「いからお前ら黙っててくれる?」

改めて安形を問いつめようとボッスンは顔を向ければ、後ろからスイッチの声とヒメコが頷きあうような会話をして、

『だつてボッスンの可愛い姿が見れるぜつてメールされねばね』

「行かないわけないやん」

ねえーと領れあひてゐる。

ボツスンのイライラが頂点に達したときに、また生徒会室のドアがガラリと開く。

「貴様ら、いつたい何を生徒会室で騒いでる居るんだ！！」

椿はぐるりと辺りを見渡して、ボッスンに目を止める。

「藤崎……それは趣味か?」

「ちが…………う…………趣味じゃない…………」

「じゃアレか、ネ」「探しか?」

「なんで!? なんでネコ探しで…? ネコ耳カチュー シャなわけ? ?  
普通違うだろ! …!」

ボッスンの声がまた生徒会室に響き渡る。

叫びすぎたためにボッスンは、はあはあと息が荒い。  
椿は首を傾げて、

「そりなのか? 棚葉先輩がそれをつけて、語尾に『いやー』とつければ見つかると言つていたが

「お前……それ完全に遊ばれてるから…」

「いやそんな筈はない! …だって飼い猫なら多少人間の言葉がわかるはず! …! やーをつければ完璧だ!」

椿は握り拳を作り、断言したが、ボッスンは力一杯否定して、

「それはなんのだ! …! ゼット一違う! …!」

「まだ言つか、藤崎! …!」

「まあまあ、落ち着けよ椿」

やつと仲裁に入った安形だが、よく見ると口元が笑っている。  
空気口メ男なため椿は気付いてないが。

「会長。なぜスケット団がいるんですか？」

「ああ。それは俺が呼んだだけだから『元』にするな」

かつつかつと笑う安形に、はあと椿も頷いた。  
ヒメ口とスイッチは見合ひ。

『我々も部室に帰るか？』

「せやな」

「じゃ俺も」

「藤崎は待つた」

「なんでだよ……」

ヒメ口たちの後にについて行つたのに、ふて腐れた表情で安形を見る。  
安形はにやりと笑つて、

「実はもう一つカチューシャがあるんだが……」

『それはね』みみか？』

スイッチは振り向いて安形を見る。  
それににやつとわらつて、

「ああ。食い付きいいな。で俺は椿も見たい」

「はあー? ほつ僕ですかー?」

「だったら勝手にやつてろよーー。」

ボッスンはふいと顔を背ければ、ヒメコがじつ輝いている笑顔が目に入った。

思わず、引け腰になり、

「ひつヒメコ?」

「ええやんーそれええやんー! ボッスンと並んでる椿みたいわ

「えつえつヒメコさん。帰らつて言つたじやん」

『そんな美味しいもの見逃せないぜ(\*ゝ・。)』

『スイッチも食い付いちやうわけ!? 椿否定しそよーー。』

「会長が見たいなら僕は別に……」

「つて付けちゃうのかよ」

全力でボッスンは椿にツツコミを入れ、  
その様子を安形は笑っている。

ボッスンはどうか回避策はないかとあぐねていると、またドアから、

「まあ。椿くんも藤崎くんも面白い格好してますわね

「モツンせつふふと微笑んで、『トージー』と雑菊も、

「かわいいなあ。モイモイには負けるが……」

表情を変えないまま言った。

ボッスンは耐えかねて、

「なんで生徒会メンバーがぞくぞくと揃つて来るんだよー。」

『それはもう定例会議の時間だからじやないかボッスン』

「やうかよ。ってなんでお前が説明してくるわけーー！」

「そんなのええから、『写真撮らへ、『写真！』

ヒメコはスイッチを押しのけて、どこからか持つてきたカメラで騒いでいる。

それに悪のりなのか妄形も、

「いいじゃんヒメちゃん。俺にも『写真ちよだい』

「ええでー。わあおー一人さん揃つて揃つてーーー！」

なぜか仕切つるヒメコにボッスンは減なりする。だつて高校生にもなつてまさかのねこみみ……。

隣の椿を見れば、いつもひとつのかわいい姿で動じていないうにみえる。

「ボッスン笑えや、せつかくのネコ耳ぬじやで」

「……やつこわれてもヒメ！」

ボッスンが弱音を吐けば、ミモリンがぱっとからめこたよつに声を出していく。

「藤崎くんがやる氣がでないのはまだオプションが足りないせいですわね？」

なんのことだらうと、みんなの視線がミモリンに集まるといつぶふと表情を変えず、外が騒がしくなってきた。

窓を見れば丹生グループのヘリが見える。

「ねこみみといえば、しつぽも必要ですかよね？」

にこやかに笑う笑顔がボッスンにとって今日最大の恐怖になつた。この後、どんな姿で撮影されたかはこ想像におまかせします。 by ボッスン

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5513v/>

---

ねこみみ

2011年8月24日12時31分発行